宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品
福岡支社　福岡市吉塚西林寺町
電話㊀㊄㊅㊇㊈　株式会社　井筒
本社　京都市下京区油小路通六条北入
電話　京都㊀㊄㊅㊇㊈　六〇六・三三四番　七三七・九九九番

春祭

神人和楽の三日間

三月三十一日、午後五時の祭に始まった当社春季大祭は、四月一日、二日の三日間に亘って行われた。又大祭期間中は各種の神振行事や春の交通安全祈願祭と相まって、社頭は大変な賑わいを見せた。

玉垣内の紅梅も花開き、樟の新緑も一段と美しさをさかる中で宵祭が斎行され、明けて四月一日春季大祭第一日祭が、午前十時から斎行された。天候には余り恵まれなかったが、祭典は順調に進められ、恒例の通り氏子奉幣神事、風俗舞、浦安舞の奉納が行われ、第一日祭は無事終了した。

本年の氏子皆用供進には宗像郡民を代表して宗像町の石松繁氏が奉仕された。

又古来より伝わる「風俗舞」は地元青年団、「浦安舞」は玄海中学校女子生徒によってそれぞれ奉仕された。

翌二日、春季大祭第二日祭終了後、宗像護国神社の春季大祭が斎行され、安部宗像郡遺族会長を始め、五十名余りの会員が参列。今は亡き美や、兄弟の在りし日を偲びつつ、人それぞれの感慨を胸に英霊を慰める祭典は静かに完った。

午後には南切流（八方百枝先生門下）による献祭が拝殿に於いて行われ、天の真名井の御神水を忌火で沸かし、南切流の袱紗捌きも鮮やかに見事な点前を披露うやうやしく神前に献げられた。

又恒例の行事として福岡県剣道連盟宗像支部（支部長北田新六郎氏）の主催による奉納剣道大会が盛大に行われた。

当日は折悪く小雨模様のコンディションとなったが、若き青少年剣士が二百名近くも参加。その上多くの父兄応援者で会場はうめつくされた。

今年は特別に筑紫郡の大野町剣友会と玄辰館の剣士が多数参加して優勝を争って行くなど、予想一般の部では、遠来の東福岡高校が優勝。若き青少年剣士等の鋭い気合いは社頭にこだまして、終日に亘り、熱戦を展開していた。三日間に亘って行われた当社春季大祭は神郡宗像を上げての一つまり」であり、年々参拝者も多く、今年も盛大裡に無事終了した。

剣道大会の成績は次の通り。

少年の部
一位　大野町
二位　津屋崎
三位　玄海町

高校一般の部
一位　東福岡
二位　〃
三位　大野町

CA　AAA

昭和四十五年度 宗像大社奨学生決定

この程、昭和四十五年度宗像大社奨学金受給生十二名（第十一回生）が、当社奨学資金運営委員会に於いて決定した。

さる二月九日、当社社殿に於いて同受給生選定会議が郡内六中学校長、当社関係職員等出席のもとに行われてより、選定が急がれていたが、この程各中学校より推薦された十二名全員が本年度受給生に決定された。

また四月二十九日（天皇誕生日）には当社神前に於いてその奉告祭が斎行され、新受給生二人に奨学金が手渡された。引続き現奨学生をもまじえ、当天社宮司を囲む懇談会が開催された。

尚新受給生は次の通り。

大島中・河野律子　福岡工業
〃・佐藤清貴　福岡工業
玄海中・樋口一恵　宗像高校
〃・内山田俊樹　宗像高校
城山中・古田啓子　福岡工業
〃・石田恵美子　宗像高校
中央中・占部妙子　宗像高校
〃・村田みち子　宗像高校
津屋崎中・本田綾子　宗像高校
〃・魚住克己　宗像高校
福間中・樋口恵子　古賀高校
〃・岡本三千代　古賀高校

沖津宮現地大祭 参拝について

来る五月二十七日、沖ノ島鎮座宗像大社沖津宮に於いて、恒例の現地大祭を斎行致します。

渡島に際しては毎年海上保安庁の御好意により、巡視船に便乗させて戴いております。

本年も左記要項により執行致しますので御案内申し上げます。

記

一、参拝者は沖津宮大祭奉賛会費一名千五百円を納めて頂きます
一、大島に前日斎泊して頂きますが、宿泊、食事等は各自御手配
御準備願います。
一、遊山、魚釣等を目的とした参拝者はおことわり致します。
一、参拝御希望の方は五月十五日までに宗像大社々務本局儀式課宛に住所・氏名・年令・職業を明記の上お申込み下さい。
一、乗船者数に制限がありますので、人員超過の際はお断り致します。

御礼

当社春祭りには種々御高配を賜わり厚く御礼申し上げます。

昭和四十五年四月
宗像大社々務本局

出光興産（株）・RKB毎日放送・KBC九州朝日放送・テレビ西日本・コカコーラ・ペプシコーラ・井筒・三浦文具・川口屋菓子店・福岡県剣道連盟宗像支部・郡内七浦漁業協同組合・西日本相互銀行・宗像警察署各位（順不同）

阿蒙少言

流行語にレジャーブームがある。咲き揃う花は、春宵一刻値千金の情緒を誘うが、雑踏の公園などは感心しないところ。塵芥と酔客で不衛生でもあり非情緒でもある。レジャーを楽しむのは人の多勢集まらぬ場所がよい○高原スカイラインに家族連れのドライブもよいが、休日は車の数とスピードが危険を伴う。団らんと英気を養う目的が、自然の風物景勝を楽しむ余裕もなく、心配と疲労に終っては家庭でのんびり過すに如かずということになる○大都会周辺に住む勤め人の家庭、主人や子供を送り出すと必ず部心に出て、デパートを巡回しなければ、日課の終らぬ夫人がある。買物があるわけでもなく、運動のために出かけるのでもない。混雑の店内を毎日同じものが列べてあるのを見て廻る。これは一日の労働を終った労務者が、縄のれんの前を素通りしては帰れぬ慣習的心理に似○割合いに酒用が掛からず健康的なのは、魚釣りである。近郊の海辺や沼地に釣り糸を垂れる所謂釣り人口は、近頃急に多くなってきた。オケンを吸って釣果を楽しむのは最上であろう。時に家族連れの釣客を見かける。戦果があれば夕食の肴のうんに二重の楽しみがあるわけ○この頃婦人の釣客が目だつ。中には会社の婦人組だけで、漁船をもとって夜釣りに出かける。漁船も婦人用があって簡単なトイレの設備までしている。金曜日頃に新聞が魚信を載せる。これを丹念に読んで研究、本職の漁夫を驚かす者もあるとか○あるある会社では社員のみならず漁夫を会社に採用し、月給を与えている。社長は休日毎に社員に釣りを奨励し、自らも用の漁夫と釣り競争を楽しんで休養をとる。こうした心遣いが、社内に融和と任事への熱意とをもたらし、故障を防止する。

（白雲）

第10回 宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

春留米　篠田太郎坊
一とこの鯉時雨如く囀れるほひよこなりけり春浅き駅
大井　吉田ますみ
潮騒の音聞じかなる街道に来てわづらわし繁き車に
津屋崎　麦野　時雄
春浅く隣りの翁盆栽の手入れに執心庭の日溜り
福岡　麻生　初栄
うとましく思ひし事もあり姑の病春浅き井戸辺にて打つ担手の遠く住む子に聞ゆと思ふ日あり
宗像　天野トモエ
せうぎの流れに光る石拾ふ浜き板橋半ば渡りて
徳重　滝口　千代
数々のはなむけあれと真心をはなは送りぬ旅立つ吾子に
大井　村山　幸生
（日航機乗取りに）
人たるの道を知らずやかたくなに罪犯き人をとり込むるとは
田島　吉武　武雄
万博に支那姑娘と語ひて雪の広野に思い馳せしも
田熊　鷲頭かつ代
好日とは言ひがたき日を過ごしと身も爛漫の春にまた会ふ
香推　桜井　ツ子
徐ろに明る襖間の紙障子寂き暁のひかりをたもつ
田熊　小野角次郎
氏神の石段道の下くぐる暗すぎ人も暫時佇む
田熊　小野かをる
日をつぎて桃の蕾のふくらむに雛の節句の尚し待たるる
名残　竹原　圓
禁猟とありしをほやも知る如く家近く来てコジュケイの啼く
戸畑　藤井　孝子
絶間なくバイパス走る車群赤目緑色様々に
武丸　立石ろせ乃
孫が受け大学入試発表の午前一時を灰つぎて待つ
大島　越智　治子
しゃくやくの赤き芽立ちに今日も又冷たき雨は降りそそぎおり
吉田　占部　由久
看護婦の生花材料運び来し花屋の荷にも花吹雪舞ふ
武丸　立石　昇
風もなく静かなる夕べ木蓮の香にひたりつつわれは佇づむ
宮田　片山　一
羽衣を舞ふとて孫は衣裳つけ舞扇もちて春前に顕つ
遠賀　長畑　房江
母の声墓部の声友の声きこえしば聾い我が夢なりき
村山田　吉田佐市郎
咲き匂ふ桜（ハナ）の下にて嬉びば敬老会の今日や楽しき
宮田　北原　君子
春一番吹き来るあした池の面のさわだつ下に魚動かす
門司　永島　哲夫
たしか住き人も居し夢惜しと醒め春はほまろの月窓にあり
遠賀　長畑　房江
咲き匂ふ桜（ハナ）の下にて嬉び聾い我が夢なりき
村山田　吉田佐市郎
父恋し母恋しと泣くらむか小雨にぬれて泣ける小雀は
徳重　石松やす子
一方の眺れしいくさ偶びつつ佗しき屋島丘の上にたつ
田久　小方　実
堀の上の雷をけちらして声限りさえずりあへる雀の三羽
田熊　岡部　緑陽
水脈をひきつつ鴨は夕光に滑るが如く湖上をわたる
宮田　片山　朔子
明日雨と予報しいる間も釣具ひろげ準備点検と子は余念なき
大井　安部　重郎
期待せし美色混合の雛菊はただ紅白の色にてありし
大井　安部　静子
うつくしく花壇ぶち取るプリムラの色とりどりに咲きし可憐さ
原町　中村　幸
希みたく六十路の旅はうらうらなり傍り給う神の居ますば
戸畑　安川　浄生
満開の花に渡はれいただきの社へ続く階の明るし
名島　吉田　信夫
手造りのくこの酒こそうれしけれ君が情を日々に汲みつゝ
福岡　高橋　傘翁
高き屋に登り見れば鯉のぼりの姿や人類（ヒト）の行末
田熊　岡部　緑陽
東郷　藤崎　辰子

春の全国交通安全週間に
安全運転の花を贈る
――国道三号線で――

去る四月六日から、十五日まで、全国一斉に春の交通安全運動が恒例により各地で実施された。宗像郡に於いても交通安全の信仰をあつめている当宗像大社と、地元の郡交通安全協会、並びに宗像警察署と、度々協議を重ね、最も効果的な方法を検討した結果、昨年とは趣をかえて「安全運転の花」をドライバー各位に配布する）ことになった。

これは、心にゆとりを持って、和やかな心でハンドルを握っていただくために、リボンフラワーのスイトピーを差上げようという趣旨のもの。

スイトピーは、長さ十センチ、花弁が二つあり、赤白黄、紫と多彩の黄緑の葉が付いている可愛いものので、これに吸着盤と、交通安全宗像大社の小さな札がついている。

花は宗像町河東のリボンフラワー講師、野田淑子さんと、その一門々財布を出して、三万にお賽銭をあげる奇特な方々もおられた。

この催しを伝え聞いた各ドライバーが午後から雲集、五千本のカラフルな花はまたたく間になくなってしまった。

昨年は、安全運転のしをりにお守りをつけて配布したが、今年のリボンフラワーは好評であった。花に添えた「しをり」には次のようにある。

スイトピーの花言葉は「愉快」「出発」です。出発前には始業点検を守りましょう。

去る四月六日早朝、まず当社に猪立山警長外関係者一同が参拝され、交通安全の祈念がなされ、当社境内より広報車隊を組み広報に出発、また午前九時半からは国道三号線宗像町須恵橋前に郡交通安全協会の代表、宗像警察署から署長をはじめ各署員、宗像大社から職員巫女等総員三十数名が集合した。

白バイの警察官が上り線の通行車輌一台を停止させると二、三分のうちに三十台余りの後続車の列ができる。これに白衣に緋の袴の巫女と警察官の混成部隊が一斉に「安全運転をお願いします」とスイトピーとしおりを配布する。

ドライバーの面々は時ならぬ警察と巫女さんの出現に怪訝な面持ちであったが、春の香りをのせたスイトピーを差し上げたのもの。

なかには、態々財布を出して、三万にお賽銭をあげる奇特な方々もおられた。

この催しを伝え聞いた各ドライバーが午後から雲集、行って、正しい社会人としての道を守ってゆくことを誓う次第です。

現在では国の祝日として、一月十五日が成人の日と定められ、満二十才に達した男女の成人を、地域の団体等で集団行事としてお祝いをしております。

神社に於いて成人祭も行われます。

(五) 結婚式

神社の境内、公民館の仮設神だな、デパート、料亭の神だな等を挙式に用いる傾向が昨今一般に盛んになりまして、神前結婚と申しております。

これは明治以後に起った慣習で、結婚、仏前結婚も見うけられますし、いづれによるも当事者の自由で、必ずしも世情の流行にしたがう要もありません。

神前結婚のくわしい作法等は別項に述べます。

宗像談話室　家庭のお祭りとお祝い (五)

(三) 入学と卒業のお祝いめでたい社会活の門出、学業を終った喜びが、家庭の皆のお祝いの気持となって現われるのは当然のことで、氏神さまに報告のおまいりをいたします。

(四) 成人祭

昔は少年期から成人の仲間入りをする「元服」の式が行われ、社会人としての待遇を受けると同時に、その責務を負うに至った転機を、他人に知らせ当人も自覚する儀式であります。

家族や近親縁者に披露するお祝いことともの、氏神さまに参拝して報告し、家庭の神棚でもお祭りを人生の新しい出発に厳粛な意義を自覚する上にも喜ぶべきことであります。

宗教的の行事によって挙式する場合、家庭が個人の宗教が、キリスト教や仏教である時は、教会本人の幸福感は勿論のこと、家族

(六) 長寿のお祝い

健康で長寿を持つことは、人間の大きな幸せで、家庭にとっても喜びであります。

緑者は敬老の祝賀感がわく次第で、九月十五日を国民の祝日とし、敬老の日と定めたことは家族の親和と増進するだけでなく、社会福祉の向上にも大きな役割を持つと言えましょう。

満六十才を祝う還暦祝、七十才の古稀祝、七十七才の喜寿祝、☆八十八才の米寿祝等は、わが国の敬老のよき慣習であります。

四、神前結婚式の作法

(一) 神前結婚式の心がまえ

結婚は男女両性が清く正しい結合によって、人生の新しい出発点に立つ神聖な行事であります。

そこに平和で理想に満ちた幸福な家庭の建設の第一歩を踏み出し、子孫の繁栄、大きくは民族の発展が考えられなくてはなりません。

従って結婚する両人だけが、目前の幸福感だけの満足を追うのでなく、自分を育てた家庭の愛情、父母、兄弟、姉妹や先祖の恩愛の情を思い、横の関係として、配偶者出身の家庭、その親族や知人との新しい交際が加わり、吉因に関する儀礼も繁雑さを増してきます。

法律的にはもあれ、長い民族の社会生活の中に出来た慣習情義は尊重し合って、親和協調の実をあげてゆくべきでありましょう。

神前で結婚式を行うには現在盛んになりましたが、昔は挙式そのものは一般の家宅で行い、三々九度と称する番いの盃をかわす行事が中心で、神さまへの拝礼報告の行事は含まれていなかったようであります。然し、当事者は勿論、家にとっても大切な結婚式を神前で厳粛に行うことはまことに意義も深く、結構な慣習と言わねばなりません。神さまは通常氏神さまか、特に信仰する神さまとされています。

沖中両宮春祭り

沖津宮、中津宮の春季大祭は、四月十九日、同二十日の両日にわたり厳かに斎行、中津宮の社頭は、氏子、崇敬者、遠来の参拝者、数百名の人出で大いに賑った。

十九日地主祭に引続き、沖中両宮宵宮祭はまず滞りなく奉仕されたが、夜中より降り始めた春雨は一夜明けた二十日になっても、なかなか降り止む気配もなく、残念ながら御遷宮、沖津宮祭は中津宮本殿祭と併せて斎行された。

定刻十一時、神前には見事な献魚献品の類が所狭きまでに供えられ、修祓に続き国家皇室の弥栄、五穀豊穣、大漁満足を祈念する久保宮司の祝詞が、朗々と奏上された。更に大島俊基氏により、氏子階層供進の儀が行われた。次に巫女によって四海波立ち世界平和を祈る「浦安の舞」が奉納された。又今年初めての神賑行事開運みくじは今年の幸運を得ようとする参拝者がつめかけ、瞬時にして締切りとなった。

高木殿祭に続き、神前で久保宮司より次の崇高著の諸氏に感謝状が贈呈された。

中津宮大幟奉納―沖栄水産代表
中村庄八、白作貝細工豆龍奉納
―沖津丸沖西保幸、真谷井袋脱衣所奉納―沖ノ島丸山吉七、山口一松、境内水銀灯奉納―海運丸遠藤隈（敬称略）

"悲しみを繰返すまじ"
玄海小学校前に信号機

この程、玄海小学校正門前の横断歩道に押ボタン式交通信号機が設置され、去る四月六日、その点灯、渡り初めの式典が当社の司祭で執り行われた。

玄海小学校は昭和四十一年に、田島、神湊両校が合併し、現在地に新築されたものであるが、正門のすぐ前を県道神湊線が通り、これを横断する各下校時の学童の安全については、当初から懸念されており、更にその後の県道の完全舗装、交通量の増加に併い、一層その危険性が増大し、学校当局は事故防止対策に日夜腐心されていたものである。然し、遂に昨年末この横断歩道上で一年生の学童が、下校時ランプカーに轢かれて即死するという痛ましい事故が発生した。そしてこの事故を契機として学校当局は論のこと、父兄間にも安全施設として、交通信号機の設置を要望する者が急速に高まり、その熱意が町当局を動かして遂に実現するに至ったものである。

当日は、玄海小学校正門に祭壇が設けられ、玄海町々長、宗像警察署々長を始め交通関係者と、田中玄海小学校々長以下全校生徒が参列し、祝詞奏上、信号機の清め祓いの後、田中校長の点灯に引続き黒田議長の手でテープに鋏が入れられた。続いて渡り初めが行われ、小学生鼓笛隊の軽快なリズムの中を神職の先導の下、各学年毎に担任先生の指導で信号機のボタンを押し、信号に従って次々に横断していったが、子供達の顔は眩しないせいか、いささか緊張ぎみであった。学校では、今後、更に指導を徹底させて安全に万全を期すとのことであるが、ともあれ、一学童の輪禍が交通安全に対する一般の大きな関心を呼び起し、それがこの度の施設となって結実したことは正に禍を転じて福となしたものであり、ひいては不幸にも、事故死した学童の霊を慰めることになったともいえよう。

写真は担任先生引率で、右手を高々とかざし、左右確認、渡り初めする学童等。

新出光石油（株）内
宗像神社春季大祭

長閑なる陽春、四月十六日、福岡市内上長浜の新出光石油株式会社本社々屋内に鎮座の宗像神社春季大祭が斎行された。

この宗像神社は、その鎮座の歴史も古く、当大社職員に依って春季大祭が斎行され出してから、最早十五年余りになろうとしている。

祭典は午前十一時四十五分、出光弘会長、林常吉社長以下全社員参列のもとに斎行され、会社の弥栄が祈念された。

徳山宗像大社
春季大祭

去る四月八日、出光興産株式会社徳山製油所、並に大浦油槽所、出光石油化学株式会社徳山工場庭内鎮座の宗像神社春季大祭が斎行された。

この三工場は業界最先端の技術とともに、働く人達の調和を許って作られたものであるだけに、広大なる工場内は花と芝生と立木によって構成され、一大緑地帯が設けられて誠に近代工場にふさわしい。

徳山製油所宗像神社祭は午前九時、山下清美所長以下四十余名の社員の参列にて斎行。引き続き、出光石油化学徳山工場宗像神社は増森禹一工場長以下四十余名の参列、大浦油槽所宗像神社祭は、春田義一所長以下十余名の参列で厳かに斎行された。

神 こうのかなと 湊

(2)

楠早鳥作
福田長庵画

（濤瀾其の二）

夜明けの光が船窓にとどく頃、許六は目を開いた。それより数刻前から喪神から覚めてはいたが、両手を固く縛しめられた口の無様な姿を見て、どうしようもないと床に横たわっていた。そして一晩中、甲板を走り廻る足音、木の裂ける音を聞いて外界に起きている事態を想像しながらまぶたを閉じていた。

光をさえぎって人影が一つ梯子を降りて来た。あいつだな・・許六は睨みあげて待った。

前夜の疲労を癒にじませた若者は無雑に許六の縄を解きながら

「島が見える名凡の位置をみてもらおうか」

と話しかけた。

「このおーっ！」

自由になった両手を振りかぶってどびかかろうとする許六に

「無駄だ、止せ、それより船と命を助ける算段をしろ」

と語気も鋭く言った。それに気おされて許六はしぶしぶ甲板に上った。

「むうっ」

船の惨状を目のあたりにしてうなった。これが船か、これでどうやって帰るのだ、怒りが熱く胸を突きあげた。

「あれだ、何とかたより着く手だではないか」

若者は前方の大きい島影を指さした。一対島かー心の中でうなずいて許六は島を凝視した。そして、にべなく、

「駄目だ、潮にのっている」

と凡てのものを拒絶するように言いはった。

「どこに流されるのか」

「解らん、難破船がこの流れに乗って無事に帰った友は一人もいねえ」この貴案のやりとりの間に島影はみるみる遠離かり、その姿を水平線から没してしまった。絶望が船子等の上を覆った。それが、昨夜から白面の男人の言うがままにされていた自嘲をこめた怒に変るとき

「騒ぐな、今争ってどうなる、それよりあと何日もつか水と食糧を調べて来い」

と若者は叱咤した。ふしょうぶしょう炊事の船子が調べに行っている間、若者は何かを思いつめていたが、約三日分の水と食糧があることを聞くや、直ちに船の中の全ての容器を甲板に並べさせ、帆布の破れを縫うことを命じた。

「いいかよく聞け、この船が今からどうなるか、俺にも解らん、しかし一旦でも生き延びねばならん。あとの頼りは飲み水だけだ。雨が降れば帆布を甲板に広げ、たまった水を容器にうつせ、そうすりゃ何とかなる」

と指示をした。この時妙なことに許六の心の中に若者に対する畏敬の念が兆してきた。これは並の男ではないなこの中なんとかなるだろうと気安を言っているがやる事が一々理にかなっている。昨夜からの出来事をみても咄嗟の処置とは言え、帆柱を倒すとはあの嵐の中で良くやったものだ。こいつは助かるかも知れんと思い、したしげな目差を向けると、若者は甲板に寝転び潮の香を胸一杯に吸っていた。これを見ることまた許六の胸は、こいつは俺の船を吾物顔にぶち壊し、人を命がけの目にあわせやがると、ど怒りがたぎって来る。

感嘆と憎悪と三つの感情の波の中で許六もまた漂っていた。

この許六等の運命を操っている潮流は、源を遠くフィリッピン周辺海域に発し次第にその速度を増し孫球に至るや、その流れを二分し、一方は日本列島の東岸を流れる黒潮となり、一方は西岸を流れ、日本海を通過し、樺太の近海に於て消滅する対馬暖流となる。黒潮は東岸に温暖な気候をもたらし、豊かな富を実らせ、対馬暖流はその上を通る朔風によってきびしい自然を西岸にもたらした。しかし、この潮流はある時は外冠の障壁となり、ある時は西方の文化を招来する道となった。

日本文化の特異性は、この潮流を民族の溜習により巧に生かしたところに始っている。外来文化摂取の時代は、この流れをゆるやかに。往来を便ならしめ、ひとたび国を鎖すとその流れを急に出入を厳にした。その間、開国中にとりいれた厖質の文化を溶解し固有文化に同化させていった。

そして、これは幅五〇粁流速五ノットの黒潮にはまれて、これ以上東へは進存なかった。

遠雷が水平線の彼方で鳴っている。許六と若者と三人の男の出会いを生んで風は遠く去って行った。

（つづく）

宗像郡

宗像会理事会開かれる

去る四月十日、宗像会理事会が宗像大社社務所に於て開催された。昭和四十三年十月、宗像郡宗像会発行の「宗像」は、宗像大社々報発行の「宗像」と合併、これに伴って宗像会事務所は当天社に移された。

この後、久しく宗像会関係の会合はなかったが、この度会がもたれるに至った。

当日の出席者は、井原元彦、井上勝之助、谷口進、的場甕、立石只、麦野時雄、高山徳七郎、古野久喜の諸氏で、これからの宗像会の運営などに諸種の意見が出されたが、次の点に合意がみられた。

一、神社発行の「宗像」に宗像会関係の記事を盛り込んでいく。このため、「宗像」に会員の消息欄を設ける。各町公民館に消息等記事の連絡をお願いする。

一、各理事は各月割当てられた原稿を提出する。

一、会費の点については、四月以降の納入状況をみて検討する。

〔宗像会の近況〕

昭和四十五年四月十日久しく開かれなかった宗像会の役員会を宗像大社で開きました。色々な事情で延び延びとなって開催されなかった宗像会役員会も各地より宗像の宗像会は何をしているのか、今は存続しているのかとのお叱りを受けておりますので、今後の運営について話会いを致しました。

「宗像」の中に記事を出しては居りましたが特に宗像会らしく記載しなかったので、社報であるとの見方もあります。

「宗像」の中に記事を出しては居りましたが特に宗像会らしく記載しなかったので、社報であるとのみ思われている向もあろうと思われますので、今回（五月号）からは宗像会関係の短編通信等を載せていただくことにしました。

記事も例月執筆役員を定め、町村の協力を得まして報告し、会員相互の消息欄も雑誌宗像の時のように掲載を致しますので、自分のみでなく知人の消息も端書で結構ですから宗像大社内宗像編輯部宛にお便りをいただきたい。総会も開く時期を研究致して居りますので出来ましたら、凡の都合のよい時期を御連絡願えれば、希望の多い時期をとりたいと思います。

宗像の発刊は在の処、一切宗像大社の御厚意に甘え、おんぶされて居りますが、総会或は講演会の開催、年一回位の雑誌形式（普通りのもの）を刊行したいのですが、経費の点もありますので年額五百円の会費は同封の振替（用紙）を使って是非御送金願いたいのです。

お小言、お叱り、御意見、論説何でも結構ですので、どしどし原稿を御送り願いたい。理事会も4 6 8 10 12 ヵ月に開催して、計画を樹てて行く積りで御座います。何卒会員諸様の御協力をお願い致します。

（宗像会会長井原元彦記）

話題の新車をみる（三十九）

コロナの巻

日産自動車の主力車種、ブルーバードのモデルチェンジ以来、コロナ1500のモデルチェンジは時間の問題であるとされていた。だが、クラス上のコロナマークⅡを発売して後、今度はコロナマークⅡの1600ccから1900cc迄のワイドシリーズ、そしてカローラ1200に続いて1400を発売すると云う噂の中から、この車は行く行く消えさるのではないかと、云う様に噂が変って来た。

だがこの噂を否定する様に、この程この車は1500cc、1600cc迄と云う型で発売された。一ツに営業車対策、一ツにコロナと云う車の持つイメージから来る営業上のプラス、これ等が発売の条件なのであろう。一度は消えかけた噂の根拠として、この車が二年半と云う超長期間に設計された一面の慌て振りから伺える。だが何はともあれコロナ愛好者諸氏に取って、今回のモデルチェンジは誠に御同慶の至りである。

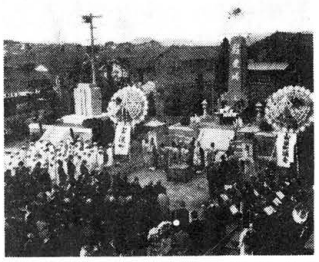
1500ccは78㎜×78㎜のスクエア・エンジン、総排気量1490cc圧縮比8・3、77ps15200rpmで旧型と同様である。1600ccは旧コロナゴールデンシリーズ、コロナマークⅡ1600に載せられ、おなじみの7Rエンジンの改良型で、7RB と云われる。

旧型に於けるフローティンと云われる斬新なデザインに比べれば、今回のモデルはおとなしく、新鮮味に欠けると云っても過言ではない。スタイルは今流行の三角窓廃止、ロングノーズ、ショートデッキであり、これも流行のサンダー、ウェーブの採用である。ボディは旧型より全長で45㎜全幅で20㎜大きく、メーター類は丸型完全無反射式である。新しい物として、カーステレオ用ポケット、埋込式2段調整ヘッドレスト、SL車に後窓くもり止め熱線式フォッガー、トルコン車に電子制御方式等の採用がある。

1600DX主要諸元、全長4170㎜、全幅1570㎜、全高1400㎜、車輌重量945kg、水冷、直列4気筒、OHC、総排気量1591cc、最高出力85ps 15500rpm、圧縮比8・5、最高出力155km/h。

旧吉武役場跡に慰霊塔竣工

宗像町吉武区の戦没者を祭る忠魂碑は今迄八幡宮飛地境内で有名な安康松の下に建立されていたが、木造神殿の建物であった為、年月の経過と共に損傷甚だしく屋根の銅板は盗難にかかり最近の状況はまことに見るに忍びないものがあった。



昨年来校区内の有志、区長会等で再建計画が進められていたので、今回役員事人や遺族会が中心となり四百万円なな安康松の下に建立の寄附金を募集、写真の様な立派な慰霊塔が完成し、去る四月十六日盛大な竣工式が挙行された。

場所は旧吉武役場跡で維新の志士早川勇翁の顕彰碑と並び御影石造り高さ二十五尺、近代的アイディアの壮厳な姿は県内屈指の呼声が高い。

この碑の題字は亀井県知事の揮毫である。

この日、県知事代理・花田県議郡選挙区会長・宗像町町長・同議会議長他関係者等二百名が参列し、自衛隊音楽隊の吹奏の中、深く頭をたれた。

（高山徳七郎記）

神郡宗像

摂末社を訪ねて（十）

久末社（若八幡宮）

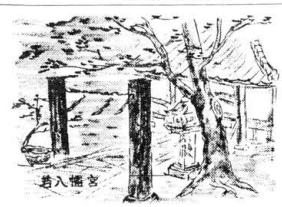
国道三号線福間バイパス入口に通堂の鳥居が聳え立ち、そこを右折し約一キロ進むと、福間町（旧神興村）大字久末字鍛冶の里に入る。このあたりになると国道を流れる車の騒音もうその様である。この旧神興村の西一町のあたり、シトギデと呼ばれる所に久末社が鎮座されている。約二坪の境内は静かで、一円に大銀杏、エノキ、楠、モミジ等が繁茂して、季節の自然美の中に何ともいえぬ森厳さを漂よわしている。境内入口には石鳥居があり、社殿には若八幡宮とみえる。そこから五十段の石段が続く。石段を登りつめたところにある鳥居に〝宮和三癸歳〟と記され、この御社のゆゆしきことを物語る。

神社帳によると、

祭神、応神天皇、仲哀天皇

神功皇后、日本武命

由緒　当社ハ宗像百八神ノ内久末明神ト有ルハ、此社ノ言ナルヘシ。天正年間宗像大宮司氏真代迄ハ、春秋二度ノ祭典有ン由。其後貞享二年三月鎮崎八幡神社ヲ勧請シ、依若八幡宮ト称シ、村民尊敬ス。明治五年十月三日村社ニ被定。例祭九月二十一日、云々と記されている。



宗像大宮司氏真の代迄では、久末神社として春秋の大祭が行われたことがわかるが、これも宗像家の崩壊とともに伝承されるには至らなかった。

其後、村人の強い願望により、若八幡宮として古式をとどめ、社殿は明治以降の、流造りの本殿、渡殿、拝殿からなっている。拝殿の天井中央にあるエト方位盤は特に注意をひくもので、この地区の人々の生活に関与していたものであろう。また、四方には三十六歌仙の歌額がびっしりと並びかけられている。これは郡内天社ではめずらしいことで、境内に天満神社が祀られていることと併せ思うとき、村人の並々ならぬ尚学心をうかがいみる思いがする。境内社は、天満神社のほかに熊野神社、須賀神社、大塚神社が祀られている。

越智先生の米寿

—祝宴盛大に催さる—

宗像大社中津宮奉仕の職員として、また地元大島村の元老として、輝かしい業績をさされて居られる越智珍夫先生は、カクシャクとお元気に米寿を迎えられた。四月十八日教え子をはじめ、村内有志、大社役員等約七十名が三国屋に集って、祝宴が盛大に開催された。

開会に当って御曹子越智汎愛氏が、先づ多数の参会に謝意を述べられ、次いで先生が参会者を交く健康な温容をもって挨拶され、一同謝恩の感激を明らひびく拍手でお答えして祝杯があがった。

司会者の指名で久保宮司が祝辞の先発を承り、数十年に亘る教育界のご功績や村長就任時のご苦労を讃えて、村の宝たる先生の長寿を祝った。教え子代表として本田村会議長が、続いて謝恩の誌を開陳すれば、感動ひとしおの涙声に変って一同の胸を打った。

先生も嬉しさを隠しきれぬ有様で、所望されるままに流前今様を朗々と歌われて皆を喜ばされたのである。その声は生き生きとして気慨に満ち、先生の若々しさをそのまま表わされたものであった。

村の最年長者たる女性であるが、男性では先生が筆頭、今後ともいよいよご健勝で村の後進を指導され、大社のご神徳高揚につとめて頂きたい祈りをこめて、万歳三唱の声が玄海の沖に高らかにひびき渡った。

（H記）

福間町の短編通信

○本年二月十六日午落成により福間中学の教室一棟（五教室）が焼失いたしました。本年中に鉄筋三階建十五教室を新築いたします。火災の時、飛火で附近の農家納屋一棟を焼失しました。

○四月三日福間町津丸出身の故詹田圭悦氏の郷里骨埋葬式が挙行され、参列者百数十名。

○四月四日福間町東福間団地（県住宅供給公社）に移転新築の神興小学校鉄筋三階建二十六教室工費約壱億六千万円の開校式が行われ、郡内一の七十年以上を経た最も古い学校が津丸より新市街然たる団地の高ノ所に最新式に新築され、移転しました。敷地は一万坪からあります。

○同時に団地前の国道三号線及国鉄鹿児島線を跨ぐ延長約百米の鉄橋（建設費負担分壱千万円町負担分弐千万円）の橋の渡初め式が行われ、鉄道東の津丸久末方面からの学童通学路を主体とした安全通学路が出来ました。

○福間競馬場跡の一部四万坪に本年より三ケ年計画で厚生省厚生年金事業団によりスポーツセンターが建設されることになりました。日本で第三番目の施設で一番勝れたものが出来ます。

○三月二十九日福間町四角出身、城野芳厳氏（劣字書記雄氏）の来訪を受けましたが、行違いの為め、お目にかかれませんでした。同氏は厚生省、福玉県庁等に歴任されて居りましたが現在は熊谷市の八幡（合貿店）に勤務、住所は熊谷市赤城町一の一四七。

○中川清氏ー神興村役場より、福間町となり、引続き十八年間公民館主事社会教育主事として勤続されましたが、四月十八日満六十才を以て退職され、手光区長として部落の世話に当られることになりました。以上

（井原記）

無事若布献上終る

去る三月二十五日、宮内庁鳥所並びに星宮へ、玄界七浦漁協産の若布が献上された。

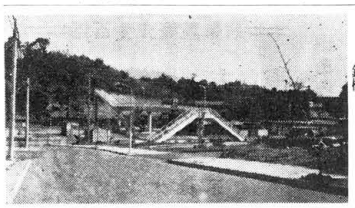
今年は異例の寒波と、台湾坊主のいたずらで若布の仲びが心配されていたが、各漁協の努力により、立派な若布が採取され、宗像大社久保宮司が鎮崎、津崎、漁協の代表二名と共に上京。献上がなされた。

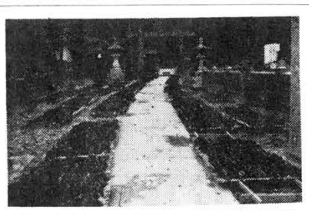
献上の後、漁協代表二名は、出光興産の計により、東京湾内を見物し、二十七日無事帰郷した。

引き続き、四月二日の宗像大社春季大祭に、七浦漁協の若布採取者に対し、久保宮司より感謝状と記念品が贈呈された。

本年は、大島、地ノ島、鎮崎、神湊、津屋崎各漁協の高齢者二名づつが選ばれ、寒さ厳しい海中に老体をいとわず採取に励まれたことに対し、長寿と健康を祈念した三組盃が贈られた。

ここに紙面を拝借し、七浦漁協並びに若布献上に御尽力下された関係者各位に対し、厚く御礼を申し上げます。





写真右　境内で建製された若布
写真左　東福間団地に出来た歩道鉄橋

宗像伝説　其の一〇一

滝の口の子安だぬき

むかし、多礼の滝の口という処にトメと云う娘が、父親権六と二人で住んでいた。母親を早く亡くしたトメは若い娘で、父親の為によく面倒をみていたが、或る日、権六は後妻を迎えることになった。

後妻が来て娘は仕事が楽になると思ったのも束の間、新しく来た母親は娘につらくあたった。トメは今迄父親と二人きりだった時の親子水入らずで楽しい夕食がなつかしかった。

新しい母親はいつも娘には残り物を与え、娘をないがしろにしていたからである。

ある日、たまりかねたトメは、裏庭の納屋に行き、冬の寒空を仰ぎながら、ひからびたおむすびを食べて、悲しみに打沈んでいた。

すると、トメの足もとに一匹のだぬきがやって来ておむすびのかけらを食べ始めた。

気持の優しいトメは、手に持っているおむすびの柔かそうな処をほぐして与えてやった。

たぬきは嬉しそうにそれを食べていたが、その時、隅の方でこと音がするので、ふとそちらを見ると、可愛い小だぬきが親だぬきを見つけて次々に這入って来た。

「まあーなんと可愛いい小だぬきさん」

トメは今迄の悲しみを忘れ、持っていたおむすびを自分は食べないで全部小だぬきに与えてやった。おむすびを食べてしまうと、小だぬき達は次々に森へ帰っていったが、母親だぬきは後をふりむき、小さな手を御礼にくわえて持って来た。トメはこの小玉をたちまちに大事にお守りのように大事にしていた。

それから暫くたった或る日のこと、父親権六が野良に母親が、トメに使いを命じた。

それは隣り部落にある千年屋敷の井戸端にある永仙を取ってくるようにとの事だった。

しかしこの千年屋敷は昔から、この中に入ると祟りがあると恐れて、村人達は誰一人として屋敷に入る者はいなかった。

トメはそれでもいやな顔をせず、黙って出かけていった。裏山を越え、部落界を通りすぎ、千年屋敷の前まで来たが、誰一人として足を踏みいれた事がないので、陰間がない程の藪で気味が悪い。

しかし恐しさをじっと我慢して藪をかきわけながら、中に入ると、古井戸の廻りにはたくさんのまむしが動き廻っていった。

見たトメは何度か井戸端に行くのを断念しようと思った。しかし母親のこわい顔がそのたびに目に浮かび、思案に暮れた。

その時、ふとたもとに入れていた小玉のことを思い出し、それを古井戸の方にぽんと投げた。

すると不思議なことに今迄うようにたまむしが、いつのまにか逃げて行った。そのすきをみてトメは井戸端の水仙を手早く取ると、一目散に家に向って走った。

千年屋敷から早く遠ざかりたい一心で懸命に走り続けたトメは、家の前に着くやいなや、ほーっと安堵して気を失なってしまった。

そこにちょうど父親権六が野良から帰り、娘のだだらぬ様子を見て、娘に今迄の事を訊ねようとした。それを見ていた母親はにらむような目つきで、ぎょろりと目をむけたが、トメはおびえながら今迄の一部始終を全部打明けて話し始めた。それを聴いた権六は真赤になっておこった。

とうとう悪い母親は家から追い出され、権六親子はまた二人きりで楽しく暮したということである。今、滝の口には大師堂がまつられているが、子安の守護として現在でも祈られお供物があげられている。

宗像大社歌会 俳句作品集 (八十九)

嘉穂　福永　アキ

神前へ捧げ参らす初メロン

吉留　伊豆　善郎

有明の雨の国道あさり売り

福岡　広田　美津

一湾に浮ぶ天草夕霞

東郷　有吉　春子

長かりし冬そと思ひ木瓜を剪る

大井　安部　吟松

日々延びるダムの築堤山笑ふ

田熊　小野角次郎

一人見におしき深山の桜花

田熊　小野かおる

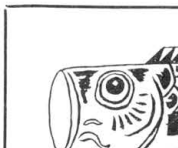
青柳の河に裾引くたたずまひ

津屋崎　井浦　良介

万緑来し妻より高き子の背丈

門司　永島　哲夫

音信を絶ちし人恋ふ春炬燵



出光佐三一問一答シリーズ (45)

働く人の資本主義

質問　当時の神戸高商といえば、最高学府であったわけですが、それにしてもよく丁稚奉公されましたね。

出光　学校の面汚しと言われましたね。なぐられはしませんでしたが(笑)、なぐりかねまじき勢いでしたね。ある同級生からは、おれが大会社の重役になるが早いか、お前が百万長者になるが早いか競争しよう、などと言われたことも覚えております。それはずいぶん毎晩されましたよ。しかしいまから思えば、自分ながらよくも丁稚奉公をやったという感じはありますね。現在からみると、学問にとらわれず、鍛練によって実力をつけた、すなわち学問の奴隷とならなかったということでしょう。

質問　酒井商会を選ばれた理由は……。

出光　いま出光の顧問をしている八尋という人がいますが、彼と私は福商(商業時代の同級生で、その八尋君が酒井商会が扱っていたメリケン粉をつくる日本製粉会社の社員でおった。そういうことから酒井商会に入ったんです。

質問　現在、酒井商会はどうなっていますか。

出光　店はつぶれました。そして長男が早くしんなって、その人の次男がほかの仕事をしていましたが、病気で会社もやめて保養していたんです。それを私の神戸の店で使ったところがふしぎなものですね、病気もなおって非常に元気になった。それで酒井商会の再興をはからねばならんがと思っていたところ、神戸の支店長があの人ならできますよと言うんです。それで、出光の直営のガソリンスタンドをわけてやって独立させたんですが、一昨年の六月が満一周年で百五十万円の純益があがった。喜んでおりましたよ。おかあさんも喜んでおられました。これからまた別のスタンドをつくってやろうと思っておりますが、これなんか、なにか因縁的なものがありますね。

人間には運とか因縁とかいうものがあります。私は二百年ぐらい前のおばあさんの恩恵を受けて運がいい言われたことがありますが、自分でそうだと思いますね。人によって非常に運の悪い人がありますね。それはやっぱり先祖のなにか積悪のむくいが来ておりますね。こういうことはいまの合理的考えでは理解できないでしょうが、理屈をこえたものが人間にあるということを心得ておく必要があると思いますね。迷っていけませんがね。なんかそういうことを信じて、自分の修養のために活かしていく必要がありましょうと思います。

質問　出光商会発足の資金を日田さんから恵まれたということですが。

出光　この恵まれたということが、外国人にはようしてもわからない。彼らには借りたというふうにしかうけとれない。ところが、日田さんは私に与えられたのみでなく、人に話すなと言われた。これはたいしたことですよ。これが日本の陰徳ですね。普通ならば人に話していけばたがりますがね。

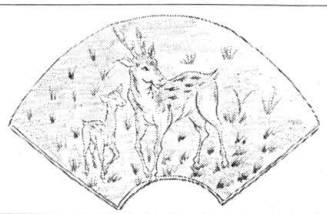
質問　いま、そんな人は少ないですね。

出光　私は日田さんからお互いという大精神、東洋の伝統である陰徳のあり方を教えられたと思います。このことは私にはなにものにもかえられない尊い教訓でした。

2 仲のよい力を発揮してきた出光の歩み

質問　日田さんから恵まれた六千円の資金をもち、単身、門司に行って出光商会をつくられたわけですね。それが明治四十四年六月二十日ですね。

出光　学校を卒業するまでの私は、一般社会人、あるいは人間としての私であったが、酒井商会に入って、商人あるいは一般経済人としての私に限定され、門司に出光商会を創業してからは、さらに石油業者としての私に限定されて今日にいたっているということです。したがって私が「働く人の資本主義」という場合、その基礎は石油業界にあるわけで、私が石油業界に入り、資本主義事業経営のなかに入ったから「働く人の資本主義」になったわけです。



しかしながら、私どもが学生時代に唱えた人間中心のあり方は、石油業界に限定されたものではありません。広く人間の尊厳を説いたものであって、普遍的なものだと思います。言いかえれば、尊厳をもった人間のあり方を石油業というところで実践しているということですね。私が戦時統制のあり方をみて、「出光は石油配給という些事をやっているのではない。人間が真に働く姿を顕現している社会を構成する人たちに、企業並びに社会の経済的な商題を十分に理解せしめるという点にある。

アメリカには一つの大発明があると、その発明が学校の教科書に取り上げられるのには五〇年かかる。学校の教科書に載った時分にはもうすでにこれは大発明どころか陳腐化されて忘れられているものだということもがある。このような技術の問題でも、非常に長い年月をかけてやっと一般的知識になるものであるから、社会的革新の場合にはおそらくもっと長い期間を要するものではなかろうか。したがって現在の高度に発展した産業社会の実態というものについては、まだ産業社会がはじまって一〇〇年しかたっていないのであるから、これについて知識がないということは、別に驚く必要はない。

なお学者の間では、現在の高度

経営とは何か

PFドラッカー

の高度に発展した国を見ても、その経済の構成というものは、非常に強い政治的な政府の統制力を必要とすると同時に、また各企業の力強い発展というものを必要としている。これはアメリカをはじめとする、いわゆる自由資本主義的国家群と同じように、また「連」においても同じようなことが必要になってきている。これは矛盾のように聞こえるが、政府首脳部とビジネス指導者たちというものは、非常に緊密な連携を取って相共に仕事を進めていかなければならないと同時に互いに独立していなければならない。

自然の法則は、政治的な圧力によってこれを変えるということはあり得ないのであって、たとえば重力の法則を、選挙によって変えていくということはできない。ところが経済あるいは社会の現実について認識を欠くということは、非常に危険である。というのは、誤った認識の上で政治的な動きが可能であるからである。したがって近代社会の中で多くの国々の人が、十分に現在の社会経済の機構を理解していないということは、重大問題といわざるを得ない。

しかしながら、私どもが学生時代に唱えた人間中心のあり方は、石油業界に限定されたものではありません。広く人間の尊厳を説いたものであって、普遍的なものだと思います。言いかえれば、尊厳をもった人間のあり方を石油業というところで実践しているということですね。私が戦時統制のあり方をみて、「出光は石油配給という些事をやっているのではない。人間が真に働く姿を顕現して「国家社会に示唆を与うるものである」と言ったのも、人間の真に働く姿をあらわすことが主であって、石油業というのはその手段にすぎないという意味です。

それが今日では「出光に定款が二つある。一つは法律上の定款で、石油業を営むということ、他は信念上の定款で、人間の真に働く姿を顕現して示唆を与うることにある」と、はっきり言いうるようになったわけです。

質問　出光商会開店後、今日まで明治、大正、昭和という時代の変遷のなかで、出光において伸びようとする力がいかに発揮されたかその大要をうかがいたい。

出光　出光は創業のときから言語に絶するような苦難と圧迫にあいながら、それらを敢然と戦って克服してきていますが、その原動力は人の力、伸びようとする力であったということなんですね。

そこでこの伸びようとする力の発揮という点から出光の歴史を簡単に話しますと、まず創業時代ですが、この時期は金にのたたかいです。私は学生時代に、〝金の奴隷となるな〟と叫べ、出光商会をつくって出発したんですから、金持、資本家の金は絶対借りなかった。そして二方においては、内池先生の教えによって商魂を排して消費者に直面するという営業方針をとった。これは事業が伸びれば伸びるほど資金がいるんです。こういう資金をたくさん要する営業形態をとりながら、金持ちの金は借りないというのですから、創業当時の出光の資金手当の苦しみは並たいていではなかった。出光は今日つぶれるか、私は自殺するだろと言われたことが何回となくあった。それで支店長会議のたびに、支店長から「私どもは商売はしないで資金集めばかりやっている。金持ちの金を借りましょう」というような意見が出る。それに対して私が反対する。そういう社内のけんかが創業後十年間くらいつづきましたよ。

そういう資金難に苦しみながらも、店員が伸びようと一致団結して消費者のために働いていると、資金はどこからとなく出てきて、難局も切り抜けていく。そういう体験を重ねているうちに、店員たちは、なるほど、みなで伸びる力をあわせて働いていれば金はなんとかなるものだということを自然と悟ったんです。現在、出光は〝資本は人なり、資金は金なり〟という言葉がありますが、これは創業後十年の体験が基礎となって出てきた言葉なんです。

その次が戦時中ですね。これは軍が法律・組織をつくって人を物扱いにしたんです。これに対して出光は満州、支那大陸で、人の真に働く姿を示して、軍のとき法律・組織の奴隷にならなかった。具体的にいうと、満州はそれまで出光がひとりで石油配給をやって、なんら支障がおきてなかったところに、軍は專売制をいった。北支も出光がやっていたんですが、国策会社をつくって二五〇人の人員を配置した。

(つづく)

『宗像郷』

竹中岩夫

上段は、御神殿の跡とて今も妻る婦人の往来をゆるす。中段の隅、今に二間四方の大日堂在、仏体十余座安置す。本社本地の尊像なり。下段は畑となれり。昔は上段は丸ご未社末堂、鐘楼、経蔵、宏麗なりと云。宮法師の住せし西光寺も此処に在しを、本宮移し奉るとき、是又移せしと云。畑の中より古瓦、又は楠、杉、松などの古根朽て出る事多し。

「西光寺、御社の麓にあり。宮法師の住寺なり。今日字に残るみ。御社記に西光寺の住僧暮林と書せり」と述べている。

西光寺という寺さは世の寺に多い。例えば、麻生氏の氏神、鳥野春日神社と関係の深かった黒崎字上の名の西光寺や、遠賀郡遠賀町の浅木神社の社僧の坊であった中間の西光寺などがそうである。

篠隈神社の神宮寺を つとめた考えられる。篠隈神社もまた、麻生氏の氏神、鳥野春日神社の神職であった波多野氏によって祭祀されるようになるが、これは、中間地方が麻生氏の支配を受けるようになったことを意味するものである。神口書上帳控は、宮林の大宮司跡の項に「宮法師の住せし西光寺も此処に在しを、本宮移し奉るとき、是又移せしと云」と述べているが、宮林にあった寺は帝賢寺で、西光寺は初めから篠隈神社の近くにあったと推定される。今も残る「西光寺」という小字(中間郵便局前付近)がそれであろう。「宮林」という地名は、八王子神社の宮法師の住寺帝賢寺があったから、「宮法師」の転化ではないかと思う。

三、総社神社

遠賀郡誌によると、明治年代にはこれほどの由緒をもった古社、篠隈神社は無格社となったこの社に近接した位置にある総社神社が村社であった。郡誌はこの神社について、次のように書いている。

(つづく)

宗像藪庵先生百話

南方

華やかなりし頃

宗像太郎坊

山あらし(つづき)

尾の基部やバルバの周囲にある鋭い棘に彼がライツを与えるとしやくさま、尾を上げてアギナを露出し、彼に寄り添って行く。体を包む棘の運動は意識的に制御することができるので、その際、コイトスの意思表示をしている彼を傷つけないように、危険な場所にあるすべての棘を倒しておく。交尾中、彼女は頭部を下方に下げて立ち、彼がペニスを挿入すると、それに呼応して激しく逆方向に臀部を動かす。この際の迅速果敢なペニス挿入は本能で、その際、膝を交互に曲げたり、伸ばしたりするが、後脚とともに尾と脚の用をして屈伸する。ペニスとともに腰から下は四本脚である。

この激しいコイトスは一分から五分で終り、妊娠期間は二一二日乃至二一七日。生後一時間の仔でも体に恐るべき棘を持っているので、他の動物からの捕食をまぬかれる。このような訳で年に一産一仔だが、立派に種を保持している。二十四時間すると母から離れ、七日もすると木に登り皮を噛る。母乳よりも固形物の方がよいらしい。胎児の時から棘があるらしい。胎児の時から棘があるので、どうしてテルスやワギナを傷つけないかというと、胎児は皮膜に包まれて生れてくるからである。

生後、直ちに母により、この膜は破られ、胎児は外に出る。こうして、宇部の動物園に三十七年八月に仔が生れている。生れた直後に二十糎あり、一匹が四～五千円もするそうである。

成人すると、一匹に棘が二万五千本もあり、この棘に多数の細かい逆刺が生えている。

この棘が他の動物の肉に突き刺さると体液を吸って膨れ、かつ筋肉の伸縮によりだんだん奥深く浸入して、ついにその動物を死に至らしめる恐しい物である。

一つ目の悪魔

昭和二十年三月、食糧不足と豪雨に悩まされた道路作業も終りを告げ、メダンの本隊に急行する時がきた。翌ジガマ山も、尽きることなきタケゴン河の清流もそれから裸の小学校も、さらば再びの辟地を訪れることはあるまい。

労務者をききに送り届けたあと、われわれのトラックの隊列は、羊腸の路を下りて行く。やがて日本酒「丹誠」の町、タンシーに近づく。行くてに聴いた滝の音が、変ることなく滔々として流れわたる。タンシーからングリの間、通りすぎる部落の庭には、ヒマの実がいっぱいに干されている。まもなく、当隊の二コ分隊が、糧秣・材料の中継のために、駐屯している温っぽい部落につく。近くに衛生隊があり、学友の中村がいたので、会いに行ったが、途中で数台の自動車がとまっており、何か厳粛に見守っている。遠巻きに、そっと見ていると、竹の先にかくい物をつけ、路傍より「やっ」という叫び声とともに突っ込んで来たキタビラの下に突っ込んでは「状況終りっ」をいわれている。敵戦車が上陸してきたときに、これをやるための訓練をしている肉弾組である。見ていると「歴歴は近衛師団長以下各部長・連隊長である。その頃、兵の衣服は戦地が永くてぼろぼろになっているのにかわいそうに、さっと大地に突っ込んで擦り破られはしなかったか。しかもそこまでは犠牲になればよいが、竹の先につけた爆薬は、スマトラの日本軍にはないのである。敵が上陸して落下傘で降りて行ったのを拾って、やるとのことで全くあいた口がふさがらなかった。

やがて本道に着く。ここはシグリという町。左に曲ればアチェ州の主都コタラジャヘ、右に曲れば東海岸州の主都メダンへ通じる。

(つづく)